

論文の内容の要旨

論文題目 「シカゴ学派」の社会学——都市研究と社会学理論

氏名 松本康

今日、社会学は、フィールドワークや統計的調査などによって得られたデータをもとに社会の諸側面を科学的に研究する学問とされている。元来、社会学は、社会に関する科学的研究であると定義されてきたが、実際に社会学が今日見られるような経験科学に転換したのは、20世紀初頭のシカゴにおいてであった。

1892年に開校したシカゴ大学では、世界で初めて社会学で博士学位を授与する社会学科を設置され、1920年代から1930年代前半の時期にパークとバージェスの精力的な指導のもとで黄金期を迎えた。大学院生たちは、おもにシカゴの社会問題をテーマとする調査研究に取り組み、その成果はシカゴ大学出版会から刊行された。これらの書物は後に「シカゴ・モノグラフ」と呼ばれ、この時期の教授陣と大学院生たちの研究実践は「シカゴ学派」の社会学と呼ばれるようになった。

1920年代から30年代にかけて米国社会学会をリードする存在であったシカゴ社会学は、その後1950年代までに構造-機能主義と計量研究の台頭によって衰退した。ところが1960年代後半になると、往年のシカゴ社会学は、反構造-機能主義・反計量研究の社会学として注目されるようになり、シンボリック相互作用論と質的研究の「シカゴ学派」という神話が生まれた。しかし、その一方で、都市社会学の分野では、ネオ・マルクス主義の台頭によって、「シカゴ学派」のラベルは伝統的な都市社会学を意味するものとして使われた。

このように多様な「シカゴ学派」像が語られるなかで、1980年代以降「シカゴ学派」に関する研究が盛んになった。本研究の目的は、既往のシカゴ学派研究に学びながら、時代とともに繰り返し回顧的に再構築される「シカゴ学派」の姿を、構造-機能主義や計量研究、ネオ・マルクス主義など他の理論的・方法論的パラダイムとの関係において捉えるとともに、主たる焦点を都市研究にあわせて、シカゴ学派の現代的意義を見出そうとするものである。

本論文は、序章、第1章～第5章、終章の全7章から構成されている。序章においては、上述したような研究の背景と目的を述べるとともに、本論文の構成を示した。第1章では、シカゴ社会学の黄金期に至るまでの前史として、19世紀後半から20世紀初頭までのシカゴ市の驚異的な発展と、シカゴ大学の設立経緯、初代学科長スモールの実践とシカゴ・モノグラフのさきがけともいべきトマスとズナニエツキの『ポーランド農民』の意義、そして1910年代の世代交代について論述した。ここでは、20世紀初頭の米国大都市の成長とそれに伴う社会改革運動の展開を背景に、シカゴ大学および社会学科が設置されたこと、またシカゴ社会学は、1920年代までの歩みのなかで、社会改革運動の科学的正当化から次第に客観的な因果連関の解明を重視する自立した学問分野へと脱皮していったことが示された。

第2章では、黄金期のシカゴ社会学について扱った。まず、パークの論文「都市」とバージェスの同心円地帯理論を踏まえたうえで、シカゴ・モノグラフを5つ取り上げて、その特徴を検討した。その結果、若干の例外はあるものの、共通する3つの特徴が指摘され

た。第一に、トマス、パーク、バージェスらの社会心理学と生態学の語彙を使って、経験的事象を記述しようとしていたこと、第二にしばしば実践的な改革提言に志向していたこと、第三に、研究には質的データと量的データの双方が含まれ、質的データは態度のような社会心理学的概念と結びつけて用いられ、量的データは社会解体などの地域特性を示すデータとして地図化され、生態学的分析に用いられたことである。

第2章の後半では、ワースのアーバニズム理論について検討した。まず「都市」が「生活様式としてのアーバニズム」を規定するというワース理論の骨子について確認したうえで、この理論に対する批判の論点を整理した。まず、従属変数に関する批判としてコミュニティ衰退をめぐる問題を、独立変数に関する批判として社会構成理論と下位文化理論を位置づけた。また、ワースの理論には都市効果理論としての側面とともに都市化の理論としての側面が混在しており、そのため都市の効果と資本主義・産業主義の効果を混同しているという批判を招くことになったと指摘した。最後に、アーバニズム理論の政策的含意として、都市の特徴である規模・密度・異質性への政策的介入は、近代都市計画の原理と親和的であることが示唆された。

第3章では、シカゴ社会学の衰退と再評価の双方に深くかかわる構造-機能主義と計量研究の台頭について扱った。パーソンズの構造-機能理論は、過度に抽象的な誇大理論であるという批判がある一方で、現代社会学の標準的な語彙を整備したと評価できる。また、マーソンの準拠集団理論やアノミー理論、スメルサーの集合行動理論は、シカゴ社会学の社会心理学や、逸脱行動、集合行動などのテーマを、構造-機能主義の精緻な概念体系に組み込むことによって、社会学のパラダイム転換を強く印象づけた。

構造-機能主義の台頭がシカゴの外部で生じたのに対して、計量研究はシカゴの内部にもその予兆があった。しかし、地域単位の生態学的相関にもとづくシカゴ流の計量研究は、個人単位のデータにもとづく個人相関を扱うラザースフェルド流の計量研究に凌駕されていく。計量革命は、生態学的相関を否定し、確率抽出にもとづく個人単位のデータをもとに個人相関を分析する方法論を量的調査の標準として確立した。

第3章の最後は、構造-機能主義と計量研究の台頭によって押され気味であったシカゴ社会学が、1960年代後半になって反構造-機能主義・反計量派の「シカゴ学派」として構築されていく過程を、1969年のブルーマー＝ヒューズ・トークのエピソードを手掛かりに確認した。ここでは、「シカゴ学派」はシンボリック相互作用論と質的研究の組合せとして捉えられ、生態学的な視点は等閑視されていた。

第4章と第5章は、1970年代に相まみえることになる都市研究の3つの潮流について扱った。このうち第4章は、シカゴ社会学の伝統のもとにある都市地域コミュニティ研究と、都市下位文化理論に結実するハーバード構造主義と「シカゴ学派」との交差を取り上げた。前者については、ワース以降のシカゴの都市地域コミュニティ研究が、コミュニティの衰退ではなく、地域コミュニティの持続と変容を主題とするに至ったことを指摘した。後者については、とくに都市下位文化理論に立ち入った検討を加えた。フィッシャーの都市下位文化理論は、都市の生態学的効果に焦点を合わせた点ではワース理論を踏襲しており、その効果を下位文化の形成に求めている点ではパークの「道徳地域」のアイデアを踏襲していた。北カリフォルニアにおけるフィッシャー自身による検証結果は複雑であったが、しばしば都市と地域の生態学的効果が確認された点で大きな意義があった。

第5章では、1960年代後半以降のネオ・マルクス主義の台頭と「シカゴ学派への挑戦」を扱った。ネオ・マルクス主義の理論としては、ルフェーヴルの「都市革命」、アルチュセールの「理論的実践」、初期のカステルの「集合的消費」と「都市社会運動」、そしてD. ハーヴェイの「資本の第二次循環」と「都市への権利」などに絞って概説した。最後に、「シカゴ学派の伝統のもとにある」都市社会学に対するマルクス主義者の挑戦と応答を特集した1978年の『比較都市研究』の誌上シンポジウムを分析した。このときマルクス主義者たちは、フィッシャーの主張する生態学的効果の意義を認める一方で、都市社会学の分野における政治経済学的アプローチの意義を認めさせることに成功した。またこの過程で「シカゴ学派」は既往の都市社会学と同義に扱われていたことが示された。

最終章では、改めて「学派」の概念を検討し、シカゴ学派が1960年代以降に回顧的に構築されたものであることを明らかにするとともに、シカゴ学派の「神話」を批判的に検討することをつうじてその現代的な意義を抽出した。本研究では、既往研究での用語法を踏まえて、学派を次のように定義した。学派とは、(1)ある学問分野の内部において、(2)独特の研究スタイルを共有し、(3)共同で研究するかあるいは研究過程と研究成果を頻繁に共有する社会的ネットワークをもち、(4)その成員が帰属意識をもち、および/または(5)外部からその存在を認識されている研究者集団である。要するに、学派とはある学問分野のなかの一種の下位文化であり、そのためシカゴ社会学が支配的であった黄金期には「シカゴ学派」という言葉は使われていなかった。1960年代になって初めて1920年代のシカゴ社会学を言及対象として「シカゴ学派」が回顧的に構築された。

ではシカゴ学派は、学派の名に値する独自の研究スタイルをもちあわせていたのか。本研究では、シカゴ学派の5つの「神話」を批判して学派としての独自性はないと主張したL. ハーヴェイの研究を批判的に検討し、シカゴ学派の現代的な意義として次の4点を抽出した。(1)社会改革のプロブレマティックのもとで科学としての社会学をめざす科学的改革主義、(2)質的研究と量的研究を併用し、多様なデータを駆使するマルチ・メソッドのアプローチ、(3)社会過程を空間的な文脈において捉え、生態学的効果に独自の意義を見出すマルチ・レベルの分析、(4)これらをつうじての理論と調査と提言の密接な結合。最後に2002年の『都市とコミュニティ』の特集「LAとシカゴ学派」を取り上げ、シカゴ学派の伝統を受け継ぐシカゴの都市地域コミュニティ研究が上記4点の特徴を踏まえたものであることを確認、マルクス主義との対比において、シカゴ学派に象徴される科学的改革主義のアプローチは、資本主義の民主的統制へのもうひとつの回路を切り拓く可能性を秘めていると示唆した。